# 自然保護はこれでいいのか

## 石川　治

自然尊重・自然愛護の精神が薄れている今日の日本において、その根本対策の一つが幼稚園から大学までの一貫した学校教育にあることは論を待たない。

自然を正しく認識し、その価値を尊び、愛護する精神的基礎は物心のついたときから、体系的・総合的に編成された教育課程の中で涵養されねばなるまいが、現場をあずかる教師として、悠長なこともいっておられぬので、三年程前から、とりあえず、北海道の主な原生林・高山植物や小動物をスライドで紹介しつつ、自然の愛護精神を高めさせるのに努めている。自然保護学のテキストもなく、指導する教師も未熟なら、とり組む生徒達の進度も遅い。

ここに稚拙ではあるが、自然を素朴に愛する子供達の声の一部を紹介したい。

（啓明中学校教諭）

## 山中京子

大むかし、私たちの先祖は、雄大で美しい自然の中に狩りをし、草や木の実などを集めて生活をしていた。現在、私たちは、よごされた自然の中に、合理的な生活をしている。

原始時代、産業もなにも発達していなく、生活も不自由だっただろうが、美しい自然、緑の木々の中に、その日を生きぬくことを考えていただろう。危険なめにあい生きるか死ぬかの戦い。でも、自然の美しさは、人々の心をおちつかせただろう。広大な青い海、すんだ川、雄大な空、星がとてもきれいに、輝いていただろう。

現在、ヘドロで汚された海、工場はい水で赤く染った川、空さえ、工場ではきだされるけむりで汚染されている。なんの病気ともわからず、何十年とねたっきの生活、おしよせてくる苦痛。どんなに苦しくつらく、くやしいだろうか。工場からはきだされたばい煙で、呼吸器の病気になることもある。そのために、呼吸困難になって死ぬ人もいる。呼吸できないとどんなに苦しいだろうか、苦しみ、苦しんでついには死んでしまう。なんてかわいそうなんだろうか。工場で、ばい煙をださないようにすればいいのにと思う。

海の生きものが工場のはい水のため、死んでいく。漁師さんは、かなしいだろう。海をこんなにされ、海面に浮かぶさかなの死がい。漁師さんたちは、しかたがなく海をはなれることになるだろう。子どものころからいっしょに育った海を。そして漁村は無人になる。こんなふうに一つ二つ三つと無人になった村、さかなはどうやってとるのだろう。もう海では、泳いだり遊んだりできなくなるかもしれない。空が工場のはきだす煙で黒く染まったら、人は住めないし、星も見えなくなるだろう。

ある日外に出て空をみあげると、一つ大きな星がきらきら輝やいていた。じっと見ているとすいこまれていくような気がする。とてもすがすがしい気がする。なんの星かわからないが、とても美しい星だ。

とても白い雪が降る。

ふわりとおちた雪。

その結晶は、とても細かくとても美しい。でもこの雪が、ばい煙と混じると、うす黒くなる。あるところでは、外に洗たく物をかけておくと、黒ずんでしまうところもあるそうだ。それでは、外で子どもたちが遊べない。子どもたちがかわいそうだ。草木のたくさんしげっている公園で、自由に遊ばしてあげたい。

新鮮な空気、すがすがしい野原、たくさんの草や花。どんなにすばらしいだろうか。どんなに体の弱い子だって、じょうぶになれるだろう。新鮮な空気を吸って、すがすがしく美しい野原で遊べば、きっとじょうぶになるだろう。自然は、お医者さんだ。

緑は、酸素をつくってくれる。私たちにたい切な酸素をつくってくれる。観光とは、その土地の美しさを見ることで、観光地とは、その場所。観光バスのはいきガスで木が枯れたり、道路の工事中にあやまって動物を殺したり、草が枯れたりする。それでは、緑がなくなる。野生の動物がいなくなる。自然を破かいしていくと、食べものがなくなり、動物がへる。わたり鳥がこなくなる。それは私たちにとって、さびしいことではないだろうか。

緑は心をおちつかせる。酸素をつくる。現在、未来の都市には、緑が必要ではないでしょうか。

現在の人々は、精神をつかう仕事をしている人が多いのだから、心をおちつかせる緑が必要だと思う。じょうぶな子ど

もにするためにも、自然はたい切だろうと思います。

## 白鳥勝美

現在の都市および未来の都市を快適な住みやすいものにするためには、交通戦争とよばれるほど、多い交通事故などをなくすこともだいじだが、町には高層ビルが立ちならび、縦横に道路がはしり、たくさんの自動車が排気ガスを、はいてはしりまわる。このめまぐるしい世の中に、緑を保護する、また緑をふやすということがだいじでないか。

ぼくはいま、幸運にも山にかこまれた緑の多いところにすんでいるが、近くの山にのぼって札幌の町を見おろせば、中心にビルが立ちならび、そのまわりに住宅街が広がっていてスモッグがたちのぼり、緑らしい緑はほとんど見られない。都市の発展とは、人口がふえて高いビルがたくさんできて、高速道路や立体交差がたくさんできるなど、たんに政治や経済の向上が都市の発達につながるというのは、おかしいのではないかとぼくは思う。ほんとの都市の発達とは、政治や経済の発達はもちろんのことだが、そのほかに近代的な物、たとえば高速道路・立体交差などや高層ビルなどと、自然（おもに緑）がうまくくみ合わさって、けっして緑のたえない、どこかゆとりのある町になることもたいせつではないかと思う。

緑は人々にどんな影響をあたえるか、ぼくはこう考える。緑は、人々の目を楽しませ、ふだんのよっきゅう不満を解消させる、そして人々をのびのびとした気持にさせる。緑は人々にゆとりをあたえる。ゆとりをあたえるということは、人々を自分にかえらせて、目先のことにとらわれたり、こだわったりしない、広い心をもった人をつくる。

そうすると、大学じゅけんにおちたからといって、自殺するような人もなくなると思う。また、緑がたくさんあれば、勉強にしばりつけられている子どもたちも、すこしは、空気のよいところであそぶことができるので、じょうぶな体になって、勉強をやっても頭にはいるのではないか。またこのように、緑にかこまれたところであそぶようになれば、肥満児なんていうのもすくなくなるのではないかと思う。それに、そのようにのんびりできるようなところがあれば、あまり教育上よくないところなどもはやらなくなり、かんきょうもよくなると思う。しかし現在の都市では、緑がいっそうへっていくいっぽう、これをなんとかくいとめることがたいせつだと思う。このままでゆくと、草や木を知らない人間ができてしまう。そのような人間ができると、人間としてなにかだいじな物がぬけ、心のせまい人間ができてしまう。

そうなると都市の発達にも限界がきて、しまいには、すこしオーバーにいうと、人類がほろびてしまうだろう。人類がほろびてしまうということは、われわれの祖先が何千年もかかって築きあげた文明を、人類自身がこわしてしまうことになるのである。人類をこのような方向にむけてはならないと思う。そこで人間は、緑をもっとふやし、自分を自分自身ですくっていかなければならない。そして未来の都市を住みやすいものにして、子孫にのこしていかなければならない。

## 後藤元伸

つい三、四年前までは、ぼくの家のまわりには、春になれば、チョウが、秋になれば、トンボなどがたくさんみられた。それがどうだろう、いまではまったくといっていいほど見たことがない。

それというのも、人口のげき増、車の増加、工場の増加などによる、はいきガス、ばいえんなどのためである。自然を守るにはまずこうした問題をなくさなければならない。しかし公害をなくすということは、まず不可能だろう。だが少なくなくとも、へらすことぐらいはできるだろう。

自然、それは人間の心のふるさと、といっても、いいすぎではないだろう。もしこの地球上に緑がまったくなくなってしまったら、どうなるだろう。そのときは人類の滅亡。ちょっと大げさかもしれないが、心のよりどころがなくなってしまうことはたしかである。心のよりどころをなくさないためにも、ぼくたちには緑を守る義務がある。

よく大通公園などで、ハトとたわむれている子どもたちがいる。こういうのを見ているとほんとに心がなごむが、その反面、池のコイを盗んだり、平気で花を折っている人間もいる。人間の心の間にこのようなことが少しでもあるとしたら、緑を守ることはできない。だから、人間一人一人が自覚して草花をたいせつにしなければならない。

今年は、ぼくにとって最初の壁、高校入試があるので、自然に親しむ機会もへるかもしれないが、長い人生、ぼく自身もっともっと自然を大切にしていきたいと思う。